

(様式3)

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

都道府県名	千葉県	市町村名	四街道市	場所	四街道市立大日小学校
派遣日	令和 2年10月 5日 ( 月曜日 ) 13:30~16:00 ※詳細は別添資料参照				
実施方法	※いずれかに○をつけてください。 ○派遣 / 遠隔				
派遣場所	四街道市立大日小学校				
アドバイザー氏名	東京外国語大学 大学院 国際日本学研究院 教授 菅長 理恵 様				
相談者	四街道市教育委員会ならびに四街道市立大日小学校				
相談内容	<ul style="list-style-type: none"><li>○ 現在の取り組みについて 入学前資料（入学申請書、個人情報カルテ）の作成や入学前準備にかかわる解説パンフレットならびに大日小学校での日本語指導の取り組み(システム)の改善点</li><li>○ 日本語のコース設計の手順について<ul style="list-style-type: none"><li>・実施把握をするための資料（入学・編入学前基礎資料、個別情報カルテ）等の改善点（別添資料）</li></ul></li><li>○ 日本語指導での標準的なレベル分けと時間数について<ul style="list-style-type: none"><li>・標準的なレベル分けは何段階程度が適切なのか</li><li>・日本語能力段階におけるそれぞれの指導時間（期間）</li><li>・具体的な日本語教育のモデル例 (指導の中で東京都日本語指導ハンドブック等を少し参考にしています)</li></ul></li><li>○ 補助教材について<ul style="list-style-type: none"><li>・「ひらがなカード」などの他に効果的な補助教材の情報提供</li></ul></li><li>○ 学級担任との連携について<ul style="list-style-type: none"><li>・日本語指導以外の教科学習時の留意点</li><li>・入り込み指導での留意点</li></ul></li><li>○ 効果的な家庭との連携<ul style="list-style-type: none"><li>・信頼関係の構築の在り方（文化の違いにより誤解が生じる場合がある）</li><li>・問題行動に対する家庭への協力依頼</li></ul></li></ul>				
派遣者からの指導助言内容	<p>◎外国人児童生徒の指導における基本的な考え方の「共有」について (※指導に関わる職員が共通理解し、共通行動ができることが必要である)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・「教える」と「学ぶ」の違いを知るとともに外国人児童生徒は「教えても学べていないことが多く、教えなくても学べていることが少ない」ことを踏まえる。</li><li>・日本語指導において課題となる「学べる」ことを増やす取り組み（子どもがどうしたら頑張れるか）を考えることが重要である。そのためにも外国人児童生徒の実態(現状)を把握し学ぶ土台を広げ、機会を増やし、動機を高めることが必要とな</li></ul>				

る。

- ・外国人児童生徒を指導する責任者は保護者を含め学校関係者全員であり、それぞれの立場でできることが重なりをもって複数ある。関係者が効果的な教育活動を進めるためにも関係者全員で指導の方針を共有し、同じ方向に一丸となって取り組むことが必要である。
- ・学ぶ土台、機会、動機づくりの手段として
  - 学習計画は関係者がサポートしやすいよう取り組みを「見える化」する
  - 学び方を学ぶサポートをする（個に応じた指導や方法を探す）
  - 自己解決ができるように本や辞書、インターネットを使う手段を伝えるとともに質問できる場を設定する。

◎言語能力測定ツール「DLA」の活用について

- ・「DLA」とは紙筆テストでは測れない、文化的・言語的に多様な背景を持つ年少者の学習言語能力を、対話を通して測る、支援付き評価法である。
- ・評価としての「DLA」の目的には、CLD児童生徒（文化的・言語的に多様な背景を持つ年少者）の習得段階(ステージ)を測定し、支援や指導計画の立案に役立てることである。  
※次のステップに進むために必要な支援を見極める
- ・習得段階(ステージ)についてはJSL評価の評価参照枠（評価の指標を記述したもの）を参考にする。
- ・CLD児童生徒の言語能力の捉え方には滞日年数、入国年齢、年齢、学習経験が大きく関わってくる。特に学習言語能力(勉強に使える言語)は入国年齢が8歳を境に変わってくる(8歳以降に入国したほうが習得期間が短い)。…小3の壁
- ・CLD児童生徒の言語能力獲得の特徴として日常会話は2年でできるようにはなるがそれだけでは教科学習に不足しており、学齢相応の教科学習言語能力が育つには最低5年の時間が必要である。そこで必要なのは効果的な教科学習言語能力の習得でありそのためにも認知力（日本語で考える力）を伸ばすことがキーポイントで、そのひとつの手段として読書量の確保が鍵であり外国人児童生徒だからこそ仕掛け作りを考えなければならない。
- ・支援としての「DLA」の目的には、CLD児童生徒の力を引き出して測る面と認めて伸ばす面がある。これは対話によって知的な活動を促し力を引き出すことで、「話を聞いてもらえた」という充足感と「できた!!」という成功体験を学習意欲に繋げることにある。  
※褒めるべきところをきちんと褒めて、モチベーションを上げる
- ・DLAの使用時期は指導計画を立案する来日時、転入時、年1回の測定時となる。来日時においては状況の把握のために母語で実施し、その結果によっては特別な支援が必要なケースもあるので丁寧に行う。転入時においては「はじめの一步」+「話す・読む」を使用する。年1回の測定時については「読む」を中心に行う。
- ・DLAはアセスメント(評価)そのものが学習活動であり評価の観点も指導の観点となる。大切なことは対話で学ぶことであり児童生徒自身の気づきがとても大切なことである。(子どもの力を引き出し測り、認めて伸ばす)
- ・指導計画は観点項目別・スモールステップで進める。

◎現在の取り組みについて

☆基本的な考え方

- (1) 学ぶ土台・機会・動機を皆で育てているか
- (2) 教科学習言語能力を育てているか(考える力、機会を与えている)
- (3) 指導計画は観点別・スモールステップになっているか
  - ・子どもの現状把握はできているか?
  - ・「見える化」はできているか?
  - ・「頑張らせる仕掛け」があるか?
  - ・計画が段階的になっているか?

◎四街道市ならびに大日小学校の現在の取り組みについて

—それぞれの立場でできることが複数あるという視点から—

○入学前の基礎資料の準備や情報の提供は十分行われている

- ・入学希望届出書 ・入学、編入学前基礎資料 ・個人情報カルテ
- ・ようこそ四街道市の学校へ(英語、タガログ語他)
  - 情報が共有され指導計画に生かされているか?…課題である

▼在籍クラスの学習との連携を「見える化」する必要がある(どんな先生も知っている環境づくりを目指す)

- ・日課表 ・個別の支援計画 ・連絡メモ

→学校全体で情報を共有されているか?さらに改善していく必要がある!!

※どの状況でも子どもの様子がわかる仕掛けが必要

▼学習した内容を直ぐに使うような仕掛けづくりをおこなう(関係者が共有)

- ・チェックシート(学習の状況を共有)
- ・学習内容を使う場面を意図的につくる(学習効果を高めるために)  
オリジナルの学習教材を作成することは大切だが、学習教材を造ることでエネルギーを使いすぎてしまうことが多く、それよりは他市町村の取り組みを活用することの方が本来の指導に生かせる。

→教材を集め、使いまわす!

学習したことをすかさず使う仕組みをつくらないと効果は上がらない。

→どこでどう使える(う)か?(取り出しクラス以外で使うチャンスづくり)

※既習の表現を用いて対話をするなど、繰り返し既習の表現を使う機会を設けることが大切。 ←学校全体の取り組みになっているか?

◎日本語能力段階におけるそれぞれの指導時間について

日本語能力試験「認定の目安」に示されてもいるが、レベル4「基本的な日本語をある程度話すことができる」まで至るには大人であっても150時間の時間が必要と示されている。そして次のレベル3は300時間、レベル2は600時間、レベル1は900時間まで要する。これは大人の教室での学習時間なので子どもの場合この時間数を普段の生活の中でも取り入れる仕掛けを作れば効果的なものとなる。

一つの例として愛知県では60日プログラム(1期から3期に分け)を作成して日本語初期指導に取り組んでいる。ここでは1日2時間の取り出し指導やできたことを褒めて、認める等の配慮事項を示し指導に当たっている。

→ 日本語指導ハンドブックを活用している(現場は上手に活用することが大切)

◎ 学習したことを学ばせる(使わせる)方法について

取り出しクラスで行っている指導と教室での学習活動を連動させる

→ 行事との連動、在籍学級での連動、家庭での連動(生活の中で連動させる)

※学級担任との連携がとても大切なこととなる

◎ 学級担任との連携について(日本語指導以外の教科学習での留意点)

—ちょっとした工夫の共有で学ぶ「土台」「機会」「動機」づくりが可能になる—

・指示することばを短く、やさしくすることに統一すること(いつでもどこでも)

→わかる言葉が増え、わかる時間帯が増えていくことにつながる

・日々のルーティーンを同じにする

→ 教科学習の進め方(導入→展開→まとめ)を同じにすると迷わず学習に取り組める(ルーティーンを固めておく)

・予告と確認をおこなう

次時について連絡を行う、授業中での動き(指示)を確認し進める

→外国の児童生徒について配慮することで遅進児への配慮にもなる

・積極的参加の場面を設ける

どのような子どもにも参加できる場面はあるので、どのような形でも授業への参加場面(活躍できる場→今、何をしているかを認知する)を設ける。(取り出しクラスで学んだことを活かせる情報共有)

→学習活動に参加するための力の育成を目指したカリキュラム開発(JSL)

・JSLカリキュラムについて

支援の在り方は直接支援と間接支援がある。具体的に授業の中で何をしたらよいのか(直接支援)は理解支援、表現支援、記憶支援に分かれている。

支援を受ける児童がどの支援を受けることが助けになるかを見極め、必要な支援を行うことで効果的な学習となる。また、選択権を与えることで学習効果は高まるので、常に与えるだけでなく「選ばせる」学習行動も大切である。

教えたことが学んだことにはならないので、しゃべらせたり使わせたりすることが中心となる活動を展開する。(いかに子どもに喋らせるか!)

・入り込み指導の留意点について

授業の設計の中で二つのパートがあることを意識して作成する。

□クラス全員が参加するパート : 全員が理解する部分(簡単で簡潔)

□語学支援が必要な子どものパート : 内容理解を優先(深く思考が必要)

入り込み指導で大切なことは、必要な時に必要な支援を行うことで授業者の話の聞かなくて済むような展開を行ってはいけない。わかるところは聞いていこうという姿勢を育て、いずれは日本語だけで授業に参加することを目標に段階的にクラス全員が参加するパートを増やしていく。

・効果的な補助教材について

文科省のホームページに「かすたねっと」という外国につながるの児童生徒の学習支援をする情報検索サイトがある。その中に全国で公開されている多言語の教材が活用できる。一から頑張ろうとするのではなく情報を活用することが大切なことだと考える。

また、文化庁のホームページにある日本語教育コンテンツ共有システムも有効な教材提供を行っている。その中でもポートフォリオは自己の学習状況を把握する(自己評価)とともに学習の見通しを持たせることができるので、中学生になれば学習者には有効なので参考にしてほしい。

他にも東京外国語大学のホームページにある多言語多文化共生センターにも算数と漢字の教材が掲載されている。特に読書の習慣づけのために読み切りやすい本として「てのひら文庫」「にほんご よむよむ文庫」がある。

・日本語指導のグループ分けについて

段階別にグループ化する方法もあるだろうが、外国人の子どもたちは同じ背景や年齢ではない。したがって違いや差をピンチとするのではなくチャンスとして違いや差を上手に利用することである。 → 「寺子屋式」

「寺子屋式」ではポートフォリオの活用がとても大切で、一人ひとりの学習状態や進捗状況がポートフォリオを見るだけで一目瞭然になる。したがって日本語指導の先生が変わったとしても、この時間は何を学習すればよいか子どもも先生もわかって学習に取り組めることになる。さらにポートフォリオを参考にし、目標に到達している子が未到達の子に教えあう場を設けることが容易になる。

※教えることで学習効果を高めることができる

・効果的な家庭との連携について

保護者との連携を効果的なものとするためにも子どもの成長を家庭に連絡することが大切である。日本語学習の伸びを褒めた上で、さらに家庭でも取り組んでほしいことをお願いしていく。(細目に)

また、家庭学習の習慣づけを仕掛けるためにも楽しく意味のある宿題を出すことを心がける。例えば音読したら母語でそのことを伝えさせることにより知的な活動となるとともに保護者が日本語を覚えるきっかけとなる。(学習を深めたり、対話のきっかけになったりするような宿題)

※「日本語を学ぶことは良いことである」という気持ちを持たせることと家庭にも理解してもらい取り組みを行うことがとても大切

☆基本的な考え方

(4) 子どもとの「対話」で伸ばす

対話は考える機会となりその活動を重ねることで子ども自身が「目標を見つけられ」たり「達成感得られ」たり「学習意欲につながる」など伸ばす機会になる。

○質疑

(質) JSL評価参照枠に6段階のステージが示されているが、ステージ5からの自立学習にある「ある程度の支援」とは具体的にどのような支援なのか国語の場合においてご指導いただきたい。

(答) 国語においては、あらかじめ要約したものを提示したり、わからない言葉を辞書などを使って一緒に調べたりすることがあるかと考えられる。

(質) 学級に複数(4人)の児童が在籍しているが、それぞれ日本語習得レベルに差

(様式3)

	<p>があるので学習の習熟度が違って一斉学習の場では十分な個別支援が難しい。また、そのような児童の評価についてどのようにすればよいか。</p> <p>(答) それぞれの児童の実態に即した支援計画を作成し、それぞれの時間でどの程度支援するのか、到達目標はどこまでなのかを同時に考えていく必要がある。評価については日本の児童と同じとするのは難しいと思う。</p>
相談後の方針の変化、今後の取組方針等	<ul style="list-style-type: none"><li>○学校全体で取り組める方法(システム)を検討する<ul style="list-style-type: none"><li>・「見える化」を進めるための具体的取り組み</li><li>・教職員一人ひとりのかかわり(何ができるか)</li><li>・ポートフォリオ、指導計画等の見直し</li><li>・保護者との共育</li></ul></li><li>○DLAの実施に向けて<ul style="list-style-type: none"><li>・個別の支援計画の見直し</li><li>・年間計画への位置づけ</li><li>・児童一人ひとりにあわせたDLAの実施</li></ul></li><li>○活用する教材の収集と体系化<ul style="list-style-type: none"><li>・組織的な情報収集</li><li>・支援計画に基づいた教材の整理</li></ul></li></ul>

1枚にまとめる必要は、ありませんので、詳細に記載願います。なお、本報告書の内容は、文部科学省ホームページで公開いたします。